

フランスの幼児教育

施設の歴史と種類

フランスの教育は、六才から義務です。教育制度は、六才以下の幼児の就学前教育も含んでいますが、それはおもに公・私立の保育学校と幼児学級で授けられます。

生まれの卑しいのですが、フランスの保育学校はすでに長い歴史を持ち、一七七〇年にアルザス地方のバン・ドラ・ローシュの牧師フレデリク・オーベルラン(Frédéric Oberlin)によって、最初のものが開かれた保育所(sales d'asile)に取って替わりました。これらの施設における活動は、いろいろな手細工や、唱歌や、読み方や、多くの祈りを含んでいました。十九世紀の経済状態と産業発展の結果として、託児所はもちろん、これらの保育所もおびただしい数になり、一八三七年以来国と地方自治体の両方

西 本 脩



によって、それらに多くの奨励が与えられています。このころ、保育所におけるしつけは非常にきびしく、児童に対する尊敬はもちろん、愛情と献身に基づく教育を實踐し、広めようと努めたひとりの婦人バブ・カルバンシエ(Madame Pappe-Carpentier)夫人に託されました。

第三共和国のもとで、保育所は保育学校に取り替えられました。保育学校(Ecole maternelle)は、一八八六年一〇月三〇日付の法律(初等教育法)と、一八八七年一月一八日付けの憲法公布によって設立されました。一八七九年以来、この創立に積極的に加わっていたホーリン・ケルゴマル夫人(Madame Pauline Bergomard)の努力のおかげで、フランスの保育学校は、それ以来ずっとあらゆる種類の教育に影響を及ぼし続けた教育改革運動

の最前線にすえられました。したがって、かの女は多分フランスの保育学校に関係がある最もおもだった人物と見なされるでしょう。

一八八七年一月一八日に公布された法令の第一条によると、「建て込んだ地域で、一二〇〇人以上二〇〇〇人以下の住民を持つ地方自治体では、保育学校は小学校付属の幼児学級プレ・エクレールに置き換えられます」一九五〇年以來、この学校と学級は、保育学校幼稚園または幼児学級幼稚園として知られています。

個人はもちろん、市当局や慈善団体や協同会社も、託児所と幼稚園を開きました。このような場合には、かれらは独力で施設を設立し、融資します。

非常に多くの五・六才児は、したがって就学前の年齢児は、保育学校も幼児学級も持たない、地方自治体の教師ひとりの学校へ通います。

組織・財政・管理

公立保育学校は、国と地方自治体の両方によって設立され、融資されています。このような施設を開くことは義務ではありませんが、地方自治体は文部省に、施設を開くように要求することができます。もし文部省が、市会の要求を聞き入れるのが正当だと認めるならば、地方自治体は、職員エムプロイーズの給料はもちろん、学校の維

持・経常費について、国に対して一〇年間責任を負い、国は教員の給料について責任を負います。

公当局によって行なわれる私立の幼児教育施設に対する管理は二種類から成っています。(一) 私立保育学校は、各部門の保育学校視学官(婦人)によって管理されます。私立幼児学級の多くは小学校の視学官によって監査されます。(二) 衛生状態の監査は、厚生省の職員によって行なわれます。

公立の保育学校と幼児学級は文部省の管理を受けており、この管理は、初等教育と補習課程の指導主事(以前は初等教育の指導主事)によって行なわれます。

保育学校の監査は、一般視学官と省の保育学校視学官(どちらの場合も婦人)によって行なわれます。この保育学校視学官は、競争試験で募集された専門の婦人職員です。

「もし保育学校監査の熟達証明書を持たなければ、省の保育学校視学官に任命されません(一八八七年七月一八日付けの法令の第一三四条)」

いろいろな特色

幼児教育はいつも義務ではなくて随意です。

施設へはいることを許すには、子どもは少なくとも二才にならなければなりません。原則として、子どもが保育学校から小学校

へ進む最高年齢は六才です。

公立の施設では、教育は無料です。保育学校の一クラスの幼児の人数は、最低二五人から最高五〇人までにわたっています。

——この限界は不変のものではありませんが。

広げられつつある都会地では、保育学校への入学児が、理論上の最大限を非常に越え、出席簿に六〇人ないし七〇人もの幼児を登録したクラスがたくさんあります。けれども、出席はどちらかといえば不規則で、めったに全部の子どもが出席することはありません。

教育内容と方法

一八八七年一月一八日付けの法令の第三条は、保育学校に適用する教育活動と方法を規定しています。すなわち、

「すべての保育学校と幼児学級では、幼児は年齢と精神発達によつて、二つの部門に分けられます。

時間割は、(一) 身体運動、呼吸運動、遊戯、歌に合わせて行なう発達段階別の運動、(二) 感覚の練習、両手の練習、図画の練習、(三) 暗唱・できごとや体験の話・事実や想像をまじえた話とともに言語の勉強、(四) 幼児に親しみのある事物や人を観察する練習、(五) 早期の道徳的行為の習慣形成を旨とする仕事、

(六) 第一部門(年長組)の幼児のための、読み方・書き方・算

数の最初の勉強、から成っています」

この教育計画は、多くの自由を残し、幼児の活動のおもな型だけを示しています。

基礎的技能(読み書き算数)の教授は、幼児学級では許されています。五才以下の幼児は、いわゆる保育学校で適用される保育要目と方法を持っています。

五才以上の幼児は、保育学校から小学校への過渡期のひとつである特別な部門を形作ります。この部門では、保育学校の教育方法が続けられますが、教育計画は小学校の就学準備課程のものとほとんど同じです。教育要目と教授については、教師たちに大きな解釈の自由を許しています。

教える言語

フランスではアルザス地方とアルターニュ地方のある地域を除けば、地方語から標準語への切り替えの可能性について、もはや考える必要はありません。他方、小学校課程の初めから外国語を取り入れる可能性についての研究が、今やなされつつあります。いろいろな実験が行なわれており、それは多分就学前教育にも広げられることでしょう。

時間割

授業時間は小学校のものであり、場所によって異なるかもしれ

ません。すなわち、午前八時から十一時まで、午前八時半から十一時半まで、あるいは午前九時から正午までと午後一時から四時まで、あるいは午後一時半から四時半までというように。

研究の中心施設

保育学校と幼児学級の女教員の総連合があり、そのおもな目的のひとつは、教育的性格のすべての問題を、政治あるいは宗教の影響にかかわりなく、保育学校および幼児学級教育の進歩と改善を目ざして研究することです。

経済生活・労働生活との関係

保育学校の設立と分布には、住民数を考慮にいれます。

保育学校に関する公式の規定は、その機能の社会的な面を強調しています。たとえば、一九〇八年三月一六日の訓令は、「保育学校は、その語の普通の意味での学校ではなく、子どもを街路の危険、および不健全な家庭における孤独の危険から守るための避難所である。したがって、保育学校は、放浪している子どもや、母親が毎日朝から晩まで家庭外で働いている子どもの日日の通学を奨励し、母親が子どもの世話をできない時間のあいだ子どもを收容し、同じ年ごろの仲間がいない子どもを休暇中手厚く扱わなければならない」と明記しています。

家庭との協力

保育学校の校長は、小学校の場合よりもいっそう、子どもの両親と——ときには父親と、だがとりわけ母親と直接的なひんばんな接触を持ちます。その接触は、おりおりの談話、家庭の状況と子どもの行動についての特別な話し合い、衣服・食べ物・衛生・習慣形成などについての助言、子どもの発達あるいは子どもの障害に関する意見の交換、などです。両親はたびたび保育学校へはいることを許され、子どもの生活を見る機会と、授業中居合わせている機会を持ちます。両親は学校の祝祭に参加し、その準備を手伝います。さらに、それぞれの保育学校と連絡して、子どもの両親の連合会があります。

医学的管理

二才から六才までの幼児の健康診断があります。すべての幼児は、少なくとも一年に一度は、完全な検査を受けなければなりません。その検査は、両親のいるところで行なうことができます。検査医（市町村か省の検査医）は、治療をしたり、療法を指示したりする必要はありません。かかりつけの医者に患児を委託するか、あるいは、その子に保健センターか病院を指示します。その子の医学的記録が作られ、観察のあらましは家庭に知らされます。

現在、保育学校は、生後二年目と三年目にジフテリアと破傷風

の強制予防接種を受けた幼児だけ入学を許しています。皮膚試験（いろいろな物質に対する個体の特殊な感受性（アレルギー）を検査すること）は、保育学校で行なわれます。

医学的な書類がとじ込みで整理され、その中には次のようなものを含んでいます。すなわち、子どもの入学のときに親が書き込んだ質問書、医者のお診察をすべて書き留めた個人記録、体重記録およびその他の測定結果、もしあれば歯科の記録、などです。

おそらくミルクの給食が準備されるでしょう。

安全と輸送

フランスでは、問題はそれほど多くは起こりません。親たちは、朝は幼児に付き添って学校へき、放課後は幼児を引き取りにくるよう要求されています。最後の子どもがいなくなるまで、夕方幼児の世話をする子どもべやが開かれます。保育学校の女教員は、かわるがわる子どもべやを受け持ち、校長はいつでも学校にいます。

建物と設備

一九二七年一月の訓令は、保育学校の建物の構造と設備を左右する条件を、細部にわたって（五五カ条）明記しています。そういうわけで、保育学校は次のような構成単位を含まなければなりません。すなわち、（一）親たちの待合室になる大きな表玄関、

- （二）校長の事務室、（三）一カ所以上の外とう類預り所、（四）娯楽室、（五）一つ以上の教室、（六）休息室、（七）洗面所、（八）台所付きの簡易食堂、（九）便所、（一〇）運動場、（一一）職員室です。

これらひとつひとつの構成単位について、設備・照明・暖房・衛生設備に関するくわしい必要条件があります。

教員の養成

保育学校の女教員は、小学校の男女教員と同じ訓練を受け、小学校教員養成学校で競争試験によって補充されます。その試験は保育学校で教えるつもりで教員に對しても、小学校で教えるつもりで教えるための特別な訓練が行なわれ、その課程の終わりにには教員熟達証明書の希望者は、保育学校の教育と関連がある問題を扱う必要があります。

訓練により保育学校の女教員に与える特別な資格を向上させるために、保育学校の視学官が視察中か一日研究グループで指令と助言を与えるのもちろんのこと、毎年女教員はかならず出席しなければならぬ教育協議会を催します。

女教員は女の助手によって学校の仕事を助けてもらい、その助手はいなければならぬことになっています。

必要な資格を持っていないものは、ひとりも雇われていません。

教員の身分

幼児教育施設の教員と小学校の教員との間に、差別は設けられていません。就学前教育と小学校教育との間に隔たりはなく、一方からもう一方へ乗り換えることができます。このような移動は、多くの規則と慣例に基づいて、行政上の手続きはもちろん、ある形式上の手続きも含んでいます。

幼児教育の発展上の困難点

望ましいことですが、もしすべての幼児が保育学校に通うことができれば、幼児たちは将来の勉学と未来の生活の準備をりっぱにされるでしょう。実は、もしすばやい計算をするならば、半分以上の幼児——正確には、十人中の六人——は、保育学校・幼児学級のどちらにも行っていないことがわかります。どこにでも、幼児学級かまたは保育学校があるとは限りません。あいにく、多くの村と小さい町には、幼児学級や保育学校はありません。こんな学級がある場合でさえも、その学級はしばしば過度の入学要求に直面させられます。この点については、多くのことがまだ成し遂げられていません。

(大阪樟蔭女子大学)

日本保育学会 第19回大会

会期 昭和41年5月21(土)・22(日)日

会場 福岡県北九州市・戸畑文化ホール

内容 (イ)研究発表

(ロ)シンポジウム

(ハ)その他

共催 西南女学院短期大学

西南学院大学短期大学部

連絡先 福岡県北九州市小倉区中井

西南女学院短期大学内

日本保育学会第19回大会準備委員会

電話小倉(56)二六三一(代表)